

にしてあか／＼と染つた紅葉が、秋風の中に頻りに踊つてゐる。自然は何處までも清く美しい。私は美の極致愛の極致を見出す。日常は宗教等から遠く離れたやうにして生きてゐる。私もいひやうのない廣いふうはりさ、自分を包んでくれる大きな愛を感じずにはゐられなかつた。同時に小さい醜い人間を思ひ出さずにはゐられなかつた。夕の色は無限の空間から押し寄せてあらゆる物象は一つ色の中に消えて行つた。大きな寂寞が天地を支配した。しかし私の心は何さなく明るかつた。そして靜かに眼を閉ちて感覺外にさまよふていつた。

手紙

エツ子

私がnといふ人を知つてから丁度二年になる、nは牛込の西の方に住んで居るある學校の先生である、今迄にも随分色々な人に逢つたけれど、巧な言葉を實行で裏切つたり、實行を愚かしい言葉で打消してしまふ様な人達許りを見て來た眼にはnといふ人は少くとも異彩を放つて見えた、私はnを依頼した、(ある程度迄云ひたい、まだ本當に握手して居ない自分はnに全部をまかせてしまふ事はしなかつた、失望を恐れるさういふ臆病な態度ではなしに)兎に角nは私が今迄中で一番自分をより多く示し、より多く信頼した人であるそのnは去年の秋郷里に歸つた時手紙をかいて出した、随分主觀的な物であつた、自分の全部を表さなかつた彼女に對して可成りにこみ入つた事迄書いた、私は始に出さうか出さまいかと散々にためらつた、さう／＼ポストへ投げこんだ時、何だか義務をすまじたかの様に感じた、二、三日経つて、私の心の一方が何だかそはそ

はし出した。nは一体何ぞ思つてゐんだらう、私はいくらnにも矢張り弱味は見せたくないのだのにと思ふと手の先迄が穩さを失つてしまつた、そして私の書簡丈が何かポストの中に残されて居る様な氣がして引つこ抜いて來様か位にも思つた、それで私はブル／＼した手で草稿を出して讀んで見た、こんなら心配しなくても好い、さ思つて文庫の蓋をした、ハタリとしたその音が、何だかnの嘲笑を宿して居るかの様に響く、私は矢張り落つた手を仕事に出す事が出来ないうで、又草稿を出して一二枚目につく様な字を拾つてよんで見た、次の日も亦文庫の蓋は何遍もそ／＼と取つたり閉ぢられたりした、草稿は、こは／＼になつて來た、それでもnからは未だ何ともなうがなかつた、せめてハガキ一枚でもよこして呉れたらさ、私は思つた、前日、バカらしいから止める、そして水曜日東京へ歸つた時逢ひさへしなければ好いちやないが、私の心が云つた、私は威張つて居様と思つた、けれ共矢張り本當は落着かなかつたし、nには逢ひたいのであつた。

出立の朝まで、こんな氣分が続いてnからは何の便も來なかつたnの重い封書を車の上で受取つた時、私は自分の乗つて居た車の底が落ちたんぢやないかしらんと思つた。

「断片より」

先生の像

うき代

近頃嬉しかつたことは青島に居られる舊師から寫眞を賜つたことであつた。

私は二人忘れ難い先生を持つてゐる。一人は小學校の時の先生で

大層いゝ先生だと思つてゐた。尋常二年から四年まで受持たれてその人格さ云ふやうなものには格別崇高だの優雅だの云ふ一つ一つの印象はないけれども、大して偉い人なつかしい先生だと思つてゐた。女學校に入つた時には先生は病氣で病院に居られたが試験の濟んだその足で花屋に行つてむる咲の櫻を買つて持つて行つた。今考へるそれは生花のお花であつたのであまり枝が大きくて殺風景なものであつたけれども私は一生懸命に活けた。小さい硝子瓶はそんなに苦心しても幾度も幾度も上が重いので覆へつて少し先生に恥しかつたが先生は大層喜ばれた。其頃の私は今もその通りであるが全く輕卒で出鱈目の事をする子供であつた。「落着かなくてはいけないよ。落付かなくてはいけないよ」といつも繰返して仰つた。既分傲岸な子供であつたので仕舞には、あゝまた仰云ふ。よく解つてゐるのに。さいやだなと思ふ心持がする程であつたが、矢張り十年後の今日も未だこの悪い性質に苦しんでゐる。惜しい事にはこの先生は其時の病氣で亡くなられたが、莫然として好い先生偉い方さ云ふ觀念は今でも消えないでしみる／＼生きて居られたらと思つてゐる。この學校に入學試験を受ける時にも先生の名に禱り先生の寫眞を懐中して行くのを母は迷信の様だと思つたけれども、それ程強い純な力となり信仰となり先生の面影は私にある。もし現存して居られたならばそんな欠點を持つて居られたかも知れないと思ふと私の裡にある先生は非常に尊いものである。

今一人はこの寫眞を下さつた先生で女學校で二年程習つたのであるが又私の胸を一生離れない像である。私は殆ど年に數へる程しかお便りをしてないけれども大きな私の安心の場所になつて居て、何か

事があつてもそこへ行けば大丈夫の様な心持で居るけれども間違はないと思つてゐる。此の間、あの怖い不安と寂寥と憂愁さに責められた日の續いた未混亂から逃れる道も知らないどん底から堪らなく叫んだ一枚の葉書が先生の席に飛んだ直ぐ、それは久しい半年に近い御無沙汰の後であつたけれども折かへして數行の文句を御一族の寫眞が來て百万の援軍の様に私に慰めさ喜びさを慫慂したのであつた。先生の手紙には別に何にも具體的のことはなくて、唯船が今出るからこれを送るさのみであるけれども私はその中にそれだけの尊い情さ深い理さ有難い諭しのあることを思つたであらう。これを持つて其の夜は絶えて久しかつた安らかな眠りに入ることが出来た。

私は此頃そう考へてゐる。眞にその人の肖像を尊く輝く死ぬるまで胸に刻みつける、そこにある人は何ぞ云ふ尊いものであらうか。自分の胸に常に持つ先生の像は神の様に美はしく清く完全である。さうしても自分と同じ人であるとは思はれない。あゝ私はこんな尊い肖像を誰の胸にほりつける事が出来やう。まつたく先生は神の様に神聖である。この心の像に於て。

私は久しく疲れて居た。やつと今日雨が降つたせいとか久し振りで嬉しい様なほ、笑みたい様な氣持になれた。浅い浅い極うはつらではあるけれども。

靜かな夕方だ。私は可愛らしい子供みた様な氣持で鐘がなつてゐるのを一心にきいてゐる。私のまわりにはすっかり何もかも捨てられてゐた。何さなくものに疲れ切つてすっかり馬鹿の様になつてゐる。青い青い空に視覺を奪はれたり、ものゝ音に氣をひかれたり官